

# 経済研究

第16巻 第4号

October 1965

Vol. 16 No. 4

## プロテスタンティズムとアメリカ資本主義

— ひとつのマックス・ウェーバー批判 —

小原 敬 士

### 1

アメリカ資本主義の特質とその形成過程を、プロテスタンティズムの教義や信仰とむすびつけて理解しようとするところの、かのマックス・ウェーバーにはじまる考え方は、一時は歴史理論の花形として学界を風靡したようにみえた。ことにアメリカでは、そのような見解は、その民主主義の体制擁護の立場に立つひとびとのあいだには、まさにひとつの金科玉条となった。

企業史家トーマス・コクランは、『アメリカの企業体制』(Thomas C. Cochran, *The American Business System*, 1960.)の中で、アメリカの企業哲学がプロテスタント倫理とフロンティア精神とを2つの重要な支柱として成立していることを指摘している。

「企業哲学は、カルヴィニズムから発した初期プロテスタントの倫理を補強した。このような信念は、いまは一部分、世俗的となっているけれども、適当な職業を選び、自分に割り当てられた仕事を果し、神の恩寵の印として成功をとげることの重要性を重視した。フロンティアの環境の一部も、企業を通じての成功を強調した。……カルヴィニズムとフロンティアの伝統は数千の田舎町や小都市の企業生活の中に吸収された。<sup>1)</sup>」

。「人民資本主義」論者のひとりであるアドルフ・バーリは、『アメリカ経済共和国』(A. A. Berle, *The American Economic Republic*, 1963.)の中でこういっている。

「ウォールト・ロストウ教授も指摘したように、経済学者にとっては、プロテスタント倫理に讃辞を呈することは、ひとつの流行となった。プロテスタント倫理という言葉は、ドイツの哲学者マックス・ウェーバーから出たものである。……実際それは、19世紀のアメリカの前進的な価値体系を具体化していた。プロテスタント倫理は、おそらく想像以上に、アメリカの経済学の発展にたいして起動的であった。<sup>2)</sup>」

そのような考え方は、わが国の学界にもひろく影響を与えている。アメリカ研究の先駆者のひとりである高木八尺氏は、その『アメリカ』(1962年)の中で、「ピューリタニズムの影響は、植民地時代の終りに主要な力であり、アメリカ精神の形成の時期にさいして、これは特殊深甚の寄与をしたことを認めねばならぬ<sup>3)</sup>」といったラルフ・ペリー

1) Thomas C. Cochran, *The American Business System*, 1960. p. 5.

2) A. A. Berle, *The American Economic Republic*, 1963. p. 189.

3) Ralph B. Perry, *Puritanism and Democracy*, 1944. の中の言葉。

Ralph B. Perry の言葉を引用した後に、「そのような見解はわれわれの見方と一致する<sup>4)</sup>」といわれる。大塚史学の系統に属するひとびとが、ウェーバーのプロテスタンティズム理論を支持していることは、改めていうまでもない<sup>5)</sup>。筆者自身もかつては、そのような見方につよくひきつけられていた<sup>6)</sup>。

しかしながら、ごく最近、アメリカその他の学界で、このような考え方にたいする反省と批判が高まってきたことは注目すべきことのようにおもわれる。われわれは、そのようなものとして<sup>7)</sup>、Kurt Samuelsson, Stuart Bruchey, Gabriel Kolko などの業績をあげることができるが、中でもコルコは、アメリカ資本主義の性格を、プロテスタント倫理とむすびついた典型的な合理的産業資本主義と考えたウェーバーに真正面から反対し、アメリカ資本主義の性格を、むしろ「政治的資本主義」と考えると同時に、ウェーバーの全体系は、「いかなる意味でもアメリカの経験と合致することはできない<sup>8)</sup>」といっている。

ここでは、主としてコルコの研究を手掛りとして、アメリカ資本主義の性格を再検討することを試みるが、そのばあいの問題点は、ほぼ(1)アメリカにおけるプロテスタンティズムはどのような社会的意義をもっていたか、(2)初期の資本主義的諸活動の発現形態はいかなるものであったか、(3)アメリカ資本主義の性格をどのように捉えるべきか、といったような点である。

4) 高木八尺『アメリカ』(1962年)5ページ。

5) 拙稿「大塚史学におけるアメリカ資本主義」

『経済研究』12巻2号, 1961年。

6) 拙著『アメリカ資本主義の形成』(昭和23年)第2章「北アメリカにおける『資本主義の精神』」。

7) Kurt Samuelsson, *Religion and Economic Action*, trans. by Geoffrey French, 1961. Stuart Bruchey, *The Roots of American Economic Growth, 1607-1861, An Essay in Social Causation*, 1965. Gabriel Kolko, *The Triumph of Conservatism. A Reinterpretation of American History, 1900-1916*, 1963. Do., "A Critique of Max Weber's Philosophy of History", *Ethics*, Lxx, 1959. Do., "Max Weber on America: Theory and Evidence," *History and Theory*, 1. 1961.

8) G. Kolko. *The Triumph of Conservatism*, p. 294.

## 2

ウェーバーは、植民地時代のニューイングランドを「牧師と得業士とを主とし、小市民、手工業者、自営農民(ヨーマン)との結合のもとに宗教的理由から創立された」ものと規定したが、それはほぼ正しかった。1620年代のイギリスからの大移住(Great Migration)は、明らかに本国におけるピューリタンにたいする政治的圧迫が主要な原因となっておこったものであった。その移住者は、ごく初期のばあいのように、冒険者、破産者、犯罪者、貧困者などではなくて、中産階級のものが多く、その中にはジョン・コトン、トーマス・フーカー、リチャード・メイザーなどのピューリタン教職者がふくまれていた。かれらは新大陸に、真の「聖書の共和国」(Bible Commonwealth)をつくることを目指していた。移民の指導者ジョン・ウインスローブは「自分は、もっとも多く神を愛することができ、自分の最愛の友人との生活を楽しむことができるような場所を、自分の祖国とよぼうとおもう」といった。1643年につくられた「ニューイングランド連合」規約の第1条には、「われわれは、主イエス・キリストの王国をおしすすめ、平和によって福音の自由を享受することを目指す」とかかれた。

事実、マサチューセッツ植民地の統治と行政の形態などは、教会と教職者が中心となって「聖書共和国」としての植民地を統治するという神政主義(theocracy)の形態であり、つまりはピューリタン寡頭政治(puritan oligarchy)であった。イギリスの反企業的小地主の伝統をうけついでいるピューリタン指導層はきびしい禁欲主義者であった。かれらにとっては、富にたいする過度の関心は、虚栄、公共利益の没却、学問の墮落、信仰への挑戦を意味するものであった。だから、そこでは商業は宗教的立場による規制を受け、あたかも中世期のような「公正価格」(justum pretium)が実施され、高利貸は禁止された。ボストンでは1633年に「木曜市場」なるものがつくられ、貿易さえも共同体全体のために捧げらるべきものと考えられた。つまり、プロテスタント神政主義のもとでは、経済生活は、中世期的束縛からは解放されたもの

の、再び新しいプロテスタント的拘束をうけねばならなかったのである。

したがって、プロテスタント神政主義と企業とのあいだには、いつでも闘争と軋轢が絶えなかった。その結果として、神政主義は、企業の批判と抵抗の前に、しだいに後退を余儀なくされた。コルコはかいている。「もしもピューリタンの宗教的観念と商人階級との結びつきが、ウェーバーが考えたように真実なものであったとしたら、摩擦はそれほど早くは起らなかったであろう。」

高利貸の禁止もしだいに緩和され、貧困者にたいする貸付は、利付のものでも許容された。商人ロバート・キーンは、不当価格を課したというかどで、植民地政府と教会によって告発されたが、かれは、それは一般的慣習であると主張してゆずらなかった。

18世紀の後半になると、植民地に一種の思想上の変革がおこった。その頃になると、啓蒙哲学の流行、ピューリタニズムの内部分裂、教会の世俗化といったような現象があらわれ、ニューイングランドの会衆派教会はしだいにその優越的地位を失った。

マサチューセッツでは、ある商人の妻アン・ハッチンソンという婦人が異端的なアンチノミー主義(antinomian heresy)を唱えて、多くの商人層の支持をよびおこした。もともとピューリタニズムの信仰では、預定説(Prädestinationslehre)にもとづく特殊の救済観から、人間は神の召命(calling, Beruf)としての世俗的職業生活に献身する義務があると考えられた。そこでは、単なる内面的な信仰のほかに、一定の外面的な行動や勤労生活が、ひとつの宗教的義務として要求された。ところがアンチノミー派は、信仰と啓示が選択の確証であると考へ、信仰と勤労との結合を不可欠の条件として要求した正統派ピューリタニズムに反対した。この異端派の指導者は、まもなくマサチューセッツから追放されたけれども、その思想は、ボストンの古い商人たちのあいだにも支持者があった。

この時期にはアルミニアニズム(Arminianism)も勢力が大きくなった。この1派も、カルヴィニズムの預定説、原罪論、救済観などに反対し、個

人の自由意志を尊重した。アルミニアニズムは主としてアングリカン教会やメソヂストに影響を与えた。サミュエル・ジョンソンのような指導的な立場に立っていたひとも、その影響を受けた。この運動はウィリアム・チャンニング William E. Channing が唱えたユニテリアニズム(Unitarianism)において絶頂に達した。ユニテリアンの信仰は、快適な人生観、啓蒙哲学、合理主義的要素と浪漫的要素との総合、敬虔と寛容との調和といったようなものが特徴となっていた。チャンニングは、キリスト教を理性の宗教と考へ、超越的なカルヴィニズムやピューリタニズムに、もっともつよく反対した。

このようなピューリタニズムからの離反の傾向は、そのような信仰と、植民地における経済的現実との矛盾を反映するものであった。当時の植民地経済は、後段で明らかにするように、必ずしも合理的ではない商業や貿易に依存することが多かった。植民地の商人たちは、キリスト教の神への信仰とマンモンの神への奉仕との矛盾に悩んだ。ニューヨークのクエイカー商人アイザック・ヒックス Isaac Hicks<sup>9)</sup> のように、世俗的な商売をやめて、慈善事業に献身することによって、その悩みを解決しようとしたものもあった。しかしニューイングランドの多くの商人は、それとは別の道を選んだ。かれらはしだいに、リゴラスなピューリタニズムから離れて、それほど制限的でない別の宗派に転向した。スチュアート・ブルーチャーは「部分が全体(ピューリタン教義の拘束力によってむすびつけられた団体)に従属していたのは、10年間位のことであった<sup>10)</sup>」とかがいている。またすぐれた歴史学者ジェイムズ・アダムスも「古いピューリタンの神学と熱意は早くから死滅しつつあった」といっている。

19世紀にはいると、教会はますますその權威を失い、その教義は急速に世俗化を傾向をたどった。コネティカットでは1818年に、教会と国家とが切り離された。マサチューセッツも1833年に、その例にならった。プロテスタントの信仰は、ひ

9) R. A. Davison によるヒックスの評伝参照。

10) Stuart Bruchey, *op cit.*, p. 142.

とつての自己目的ではなく、そのひとの世俗的生活のための手段となった。そのことは、ウェーバー自身が、1904年のアメリカ旅行で実際に見聞したことであった。かれは、北カロライナのある小都市で、近く銀行業をはじめようとしていたひとが、バプティストの洗礼をうけている情景をみた。そのひとが受洗によって新教セクトにはいることは、それによって社会的な信用資格(Kreditwürdigkeit)をうるためであった。ウェーバーはいう。

「バプティストの団体への参加許容は企業者の倫理的資性にたいする絶対的な保証として通用する。このばあいには、その銀行家にたいする附近一帯の預金と無制限の信用とが、なにびとも競争できなくなるほど確実となる。」

「それゆえに、セクトの成員となること(Sektenmitgliedschaft)は、……人格にたいする倫理的、ことに職業的適性がもっとも十分であることを意味する。<sup>11)</sup>」

## 3

マックス・ウェーバーは、プロテスタントから発する「資本主義の精神」は、18世紀のアメリカが生んだ天才ベンジャミン・フランクリン Benjamin Franklin(1706-1790)において頂点に達したと考え、かれの『若き職人への忠告』(Advice to a Young Tradesman, 1748.)をもって「資本主義精神の代表的な文書」とみなした。しかし、事実においては、フランクリンにおいて頂点に達したのはプロテスタンティズムそのものではなくて、前節で略述したようなプロテスタンティズムの世俗化の過程であった。

フランクリンは、この『若き職人への忠告』や『貧しきリチャードの暦』(Poor Richard's Almanac, 1732-57)などにおいて、勤労、節約、誠実といったような「市民的美徳」を説いた。かれは、その両親の墓碑銘に次のような美しい言葉を刻んだ。

「ジョサイア・フランクリンとその妻アピアここに眠る。／かれらは婚姻にむすばれて55年をともに過した。／そして、屋敷もなく、利益多き職もなかったが、／不断の勤労と誠実な勤勉により／(神の恵みをえて)／心楽しく大勢の家族を養い／13人の子供と7

人の孫を／立派に育てた。／これをよむものよ。／かかる実例によって／あらゆる職業における勤勉への励ましをえんことを。／摂理への不信をいだかざることを。<sup>12)</sup>」

ウェーバーはフランクリンのそのような言葉の中にプロテスタント倫理の最高の表現を見出した。かれはいう。「この倫理の至高善(*summum bonum*)というべき、一切の自然の享樂をきびしく拒けてひたむきに貨幣を獲得しようとする努力は幸福主義や快樂主義などの外被を全然帯びていず、純粹に自己目的と考えられている。<sup>13)</sup>」

しかし、このようなウェーバーのフランクリン観は、明らかに一面的であった。フランクリンは、アメリカの代表的ブルジョアのひとりであったことは疑いが無いが、しかしかれはけっして代表的なプロテスタントではなかった。コルコは、ウェーバーはフランクリンの著作の有名なものを大急ぎで読んだだけであって、「このアメリカの典型的なブルジョアの中にあつた矛盾、軋轢、偽善などの要素に気がつかなかつた。フランクリンは、ウェーバーの清教徒的禁欲主義者の原型よりも、むしろ資本主義を不可能ならしめたといわれる中国の官吏の方にずっとよく似ていた<sup>14)</sup>」という。

クルト・サミュエルソンもプロテスタントとしてのフランクリンを否定して、次のようにいう。

「フランクリンはカルヴィニズムの信条の中に育てられたけれども、かれの特殊の宗教的気風は、けっしてカルヴィニズムの烙印を帯びていなかったし、かれはまた誰がみても判るくらいにピューリタンではなかった。むしろフランクリンの際立った特徴は、完全な解放であった。<sup>15)</sup>」

ジェイムズ・T・アダムスのフランクリンの評価は、さらにいっそう現実的であった。かれはこうかいている。

「機敏で、實際的で、いつでも大きな機会を逃がしたことがなく、また金儲けと世間的な出世に熱心で、

12) Sydney G. Fisher, *The True Benjamin Franklin*, 1898, p. 70.

13) マックス・ウェーバー(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムと資本主義の精神』(岩波文庫 上巻 47ページ)。

14) *History and Theory*, 1. 1961. p. 255.

15) Kurt Samuelsson, *op. cit.*, p. 56.

11) Max Weber, *Gesamt. Schrift. f. Religionssoziologie*, 1. S. 210-211.

しかも金儲け以上に生活に抜け目がなかったかれは、一方ではニューイングランドの知識人らしい真の深みや宗教的情熱が少しもなかったし、他方では南部の地主のような人間味や、もって生れた気品というものが少しもなかった。<sup>16)</sup>

フランクリンは印刷術を学ぶためにイギリスへゆき、そこで重農主義思想の影響を受けた。そのためにかれは、農業が生産的な富の唯一の源泉であることを主張するようになり、同時に製造業者、自由職業人、商人などは、すべて経済過程の中で無益に等しいといった。しかし他方ではかれは、次のようにもいっている。

「ある国民が富をうるには、3つの方法しかないようだ。第1のものは、ローマ人がその近隣を略奪したばあいのように戦争である。それは強盗である。第2は商業によるものであるが、これは一般に欺瞞である。第3は農業であって、これだけが唯一の正直なやり方である。<sup>17)</sup>

フランクリンは、その私生活においても、けっしてモラリストではなかった。かれは20才でロンドンにいったときにも、ピューリタンのように節約や貯蓄はやらなかった。むしろかれは非禁欲主義者のようなやり方で劇場、スポーツ、飲食、女性などに金をつかった。かれは年とってから、駐仏大使として単身パリに赴任したときにも、奢侈と享樂の生活を送った。

かれは富をつくるばあいに、政治的關係がひじょうに役に立つことを知っており、さかんに政治的徒党を利用した。かれは「紙幣の必要」についての論文をかいたが、それは結局政府から紙幣印刷の契約をとりつけるためであった。かれは1764年までペンシルヴェニア州の公認印刷業者であった。かれはイギリスの資本家や、フィラデルフィア・アソシエイツとむすんで、大規模な土地投機計画にも関係していた。

フランクリンは『若き職人への忠告』の中で、誠実、勤勉、時間厳守、節制、秩序といったような市民的美徳を説いた後に、「富に至る道は、市

場に至る道と同じように平坦である。それは2つの言葉にかかっている。時も金も浪費するな。その両方を最善の方法でつかえ、」といった。この言葉は、あくまで富をうるための合理的手段を教えたものであって、そこには、経済活動は神にたいする義務であり、その成功は神の恩寵の確証であるといったようなプロテスタント倫理は示されていない。

フランクリンは結局、典型的な啓蒙された合理主義者であって、けっして型通りのプロテスタントではなかった。それは、ほかならぬフランクリン自身がきわめて明瞭にいい表わしている。

「わたくしたちはプレスビテリアン(長老派)として宗教的な教育を受けた。しかし、その説教のある種の教え、例えば神の永久の命令、選択、遺棄などの言葉は、わたくしには判らなかつたし、またほかのものは疑わしくおもえた。わたくしは早くから、教派の公けの集会には欠席するようになった。日曜日は自分の勉強の日であったから。<sup>18)</sup>

## 4

マックス・ウェーバーは、アメリカの近代資本主義は「営利を目的とする資本家によってつくられた南部連合諸州」においてではなく、「宗教的理由によって創立されたニューイングランド植民地」においていち早く形成されたのであり、そして、そのような体制をつくり出した主体は、南部の独占取引業者、御用金融業者、植民地企業者、発起業者などではなく、北部の、プロテスタント倫理によって訓練された中産的生産者層であったことを指摘した。

しかしながら、アメリカ経済史の現実に照らしてみるならば、ウェーバーの類型設定はあまりにもゆきすぎた理念型形成(Ideal-typen-bildung)であって、必ずしも歴史的事実に照応していないようにおもわれる。

コルコの見解によると、北部植民地においても、ウェーバーの意味の合理的資本主義の創出のための諸条件はけっして十分に備わってはいなかった。むしろ「もしもわれわれが、植民地経済を簡潔に特徴づけようとするならば、われわれは、植民地

<sup>16)</sup> James T. Adams, *The Epic of America*, 1939, p. 69.

<sup>17)</sup> Lewis J. Carey, *Franklin's Economic Views*, 1928, p. 150.

<sup>18)</sup> Sydney G. Fisher, *op. cit.*, p. 79.

はウェーバーの意味の合理的資本主義の創出のための条件の全部ではないにしても大部分を欠如していたといいたくなる。<sup>19)</sup>」そればかりか、北部植民地は、およそ西欧的な資本主義体制とは異なった類型の経済体制をもっていた。ピューリタン寡頭政治がつくり出そうとしたものは、ウェーバーのいわゆる「宗教的かつ功利的福祉国家の性格」すなわち、神政主義の烙印を有する家父長的官僚的構造の他の多くの典型的特性と調和するような性格の共同体」であり、それは文官統治の中国の目標と似ていなくもない、とコルコはいうのである。

実際、北部植民地では、必ずしもプロテスタント的精神構造と生活様式が優越していたとはかぎらなかった。事實はむしろその逆であった。歴史学者アーサー・M・シュレジンガーは『植民地商人とアメリカ革命』(1918年)の中で、ニューイングランドの西印度貿易では、ラム酒が重要輸入品であったが、それは植民地全体の非禁欲的な生活慣習を反映するものであったことを指摘した。

「ラムと糖蜜は西印度貿易の重要な基本物資となった。ニューイングランドの商人が、その生産物である魚類、木材および雑貨と西印度のラムとを交換することができたのは、植民地全体の農民、職人、漁民などの明らかに非禁欲的な習慣のおかげであった。1720年当時には、ニューイングランドの主要製品はラムであった。そのうち7分の1は奴隷貿易のためにアフリカに送られ、一部は毛皮貿易によってインディヤンの手に渡ったが、しかしその大部分は植民地に残った。<sup>20)</sup>」

ニューイングランドのポーツマスからニュー・ロンドンに至るあいだの海岸都市はいずれも貿易と海運の中心地となった。それらの都市は、いわば前期的な商業資本家、いわゆる「海上豪族」(maritime gentry)の巢であった。かれらはしばしば、非合理的、非合法的な商業取引をおこなった。私拿捕船活動、密貿易、脱税、積荷の非合法的陸揚げなどはごく普通のことであった。「密貿易は、商業地域(ニューイングランド)の商人のほとんど専業であった。」(シュレジンガー)それに関

連して、役人との結託、贈賄、議員の買収、総督への運動といったようなことも、けっして珍らしくなかった。奴隷貿易もさかんであった。特異な歴史家マクマスターもかいている。

「もしも奴隷所有の不名誉が南部に属するならば、奴隷供給といういっそう大きな不名誉はイギリスと北部が背負うべきものである。……黒人を買入れ、それを奴隷に売るとは、ニューイングランド都市の住民にたいする利潤の源泉となった<sup>21)</sup>。」

ウェーバーは「『禁欲的節約の強制』のために、投資の排け口を求める資本がつねに存在していたピューリタンの北部」では、そのような資本蓄積のために、南部に比べてきわめて早い時期に近代工業を発展させることができたと考えていた。かれはこうかいた。

「ニューイングランドでは、植民地建設の最初の世代から、すでに会社形態の鉄工所(1643年)や、市場目あての毛織物織布業(1659年)が存在したこと(その他手工業の高度な発達が見られたこと)は、純粋に経済的観点からみれば、驚くべきことであった。それは南部の諸事情のみならず、カルヴィン派でなくて、良心の自由が完全にたもたれていたロード・アイランドとも顕著な対照をなしていた。……ピューリタンの消費制限の影響力が、節約された資本をたえまなく再投資させる方向への強力な推進力となったことは毫も疑いをいれない。<sup>22)</sup>」

しかし、ウェーバーのこのような見方は二重の誤りをおかしているようにおもわれる。というのは、北部の産業発展の南部にたいする先行性は必ずしもそれほどはっきりした事実ではなかったし、北部の工業化過程とプロテスタンティズムとの因果関係もけっして十分に明白ではないからである。

工業化の企図は南部においてもかなり早くからおこなわれていた。ヴァージニア州では、1611年に煉瓦窯が建設されているし、1621年には最初のガラス工場が建てられた。マサチューセッツ州のピューリタン寡頭政体は1640年に各都市の青年男女に織布技術を教える組織をつくったが、ヴァー

19) *History and Theory*, 1, 1961, p. 252.

20) Arthur M. Schlesinger, *The Colonial Merchants and the American Revolution, 1773-1776*, 1918, p. 25.

21) John B. McMaster, *The History of the People of the United States*, 1885, vol. II, p. 15.

22) 前掲『プロテスタンティズムと資本主義の精神』岩波文庫 下巻228ページ。

ジニア州でも1646年に、ジェイムズ・タウンに麻織物の技術を教えるための2棟の公共施設を建てた。メリーランド州も同じような学校を設立した。

ウェーバーは北部における製鉄業の早期の発展を指摘しているが、製鉄は明らかにヴァージニアの方が早かった。もともとヴァージニア植民地が建設されたそもそもの理由のひとつは、その地の鉄をイギリスに供給するためであった。同州では1621年に、フォーリング・クリークに完全な製鉄工場が建設された。この工場は間もなくインディヤンの蜂起によって破壊されたけれども、植民地時代を通じて、アメリカのもっとも重要な製鉄中心地はヴァージニアとメリーランドであった。その後1750年には、ペンシルヴェニアが首位となった。

北部植民地において、ピューリタンの節約によって多額の資本が蓄積され、それが近代工業に投下されたという命題も十分な事実上の裏づけがない。1670年、マサチューセッツに建てられた同州最初のガラス工場は、間もなく「資金不足」のために操業を停止した。同じくマサチューセッツに、早い頃に建てられた製鉄工場はイギリスの資本によるものであり、その額は最後には15,000ポンドに上った。しかし、それにもかかわらず、同州のいちばん古い製鉄工場は、1652年、資金難のために衰退した。

ただニューイングランドにおいて、木綿工場が、きわめて早くから、急速な発展をとげたことは際立った事実であった。ことに、1820年代以後、ローウェルを中心とする木綿紡織工業の発達にまことに目覚しかった。しかしながら、それらの木綿工業に投下された資本は、主としてプロヴィデンス、ボストン、ニューベリーポートなどの「海上豪族」によって蓄積された商業資本であって<sup>23)</sup>、ピューリタンの節約によって作り出された「民富」ではなかった。北部における工業化と宗教的要因との因果関係は必ずしも明らかでない。

そのほか北部における非プロテスタント的な経済活動として是非とも挙げなければならないもの

は、東部の有力な商人や政治家によってさかんにおこなわれた西部における土地の獲得や投機の活動であるが、ここでは、それを詳論するいとまがない。

## 5

マックス・ウェーバーは、近代資本主義の特質を、商業利潤の非合理主義的な獲得を目的とする中世期的賤民資本主義(Paria-Kapitalismus)とは本質的に異なるところの剰余価値の合理主義的な創出と実現を目的とする産業的経営資本主義と考え、そしてそのような経済体制の成立は、勤労と節約などの「市民的美徳」を尊重するプロテスタント倫理の形成と、ふかい内面的なつながりをもっていることを見出した。そしてかれはアメリカ資本主義こそは、かれの一般理論の正しさを、もっとも明白に証明するものであると考えていたようにみえる。

しかしながらわれわれがアメリカ社会の歴史過程の即物的な追求によって見出すものは、プロテスタンティズム倫理の発展ではなくて、むしろその急速な世俗化であり、宗教的規範による経済生活の拘束ではなくて、その規範からの完全な解放であった。その結果としてあらわれたのは、かのつつましい中産的生産者層ではなくて、なにものにも拘束されずに、ひたすらに金銭的所得を目指すたくましい「独立独歩のひと」(self-made man)であった。ウェーバーとちがって、近代資本主義をつねに「産業体制」と「営利企業」との二元性において捉えようとしたソースタイン・ヴェブレンは、植民地時代のアメリカの先駆者の人間類型を、はじめから、真に解放された「独立独歩のひと」とみなした。かれはいう。

「アメリカの伝統を形づくる上に大きな影響を及ぼした北大西洋岸共同体の先駆者たちは、個人的決定権を尊重するイギリスの先入観のやや念入りにつくられた変種をもってきた。かれらは、この伝統を、果敢な発展にとくに適した状況のもとに、実行に移した。かれらは、かつて手工業制度を拘束した規範的な掟での残滓をほとんどもってこなかった。そして植民地の生活状態は、私的創意を抑制するような因習的な規制の新しい成長を促進するようなことはなかった。アメリカ

23) この点については拙著『近代資本主義の地理学』昭和40年、第5、6章で詳論した。

は独立独歩のひとの故郷である。そして独立独歩のひとは、金銭的有機体である。<sup>24)</sup>

このような「金銭的有機体」としての独立独歩のひとは、金銭的利得のためには、商略、欺瞞、投機、政治的不当利得、独占、サボタージュ、植民地主義といったような非合理主義的な活動をも、ためらうことがなかった。それは、19世紀後半の「金ピカ時代<sup>25)</sup>」(gilded age)にもっともはっきりとあらわれた。そして、このようにして成立した経済体制はけっして、ピューリタンの合理的資本主義ではなかった。それはむしろ、ウェーバーが、中国に固有なものと考えた「政治的資本主義」に近いものであった。

ウェーバーは、アメリカ、ことにその北部にお

ける「金銭的、略奪的」(ヴェブレン)経済活動と、その負担者である営利企業者の存在に目をつぶった。しかしわれわれは、そのような人間類型が存在し、そして指導的役割を演じていることを無視することができない。ガブリエル・コルコも『保守主義の勝利』の中でこういつている。

「ウェーバーは[かれ自身が]予知することができる政治的産業的組織を望んでいたばかりでなく、政治的方法や縁故関係による利潤獲得の過程で、自分たちのために役立ち、自分たちが、産業的金融的合理化に達するのに好都合となる組織を希望するような型の資本家[の存在]を無視した。しかし、このような集団が、アメリカの政治的経験をつくり出し、政治的問題点をきめる上に、決定的なものであった。<sup>26)</sup>」

24) T. Veblen, *The Theory of Business Enterprise*, 1904, p. 273.

25) この時代の“Robber Baron”概念と、その修正理論にたいする反批判については、Allen Solganick, “The Robber Baron Concept and its Revisionists,” *Science and Society*, Vol. xxix, No. 3, Summer 1965. 参照。

26) G. Kolko, *The Triumph of Conservatism*, 1963, p. 299-300.